

## 不治の病の治療に対する飼い主の期待についての質的研究

矢野 淳<sup>1), 2)†</sup> 黒髪 恵<sup>2)</sup> 日高崇博<sup>2)</sup> 森中恵子<sup>2)</sup> 本徳勇氣<sup>2)</sup>皿田洋子<sup>2)</sup> 田村隆一<sup>2)</sup> 林 幹男<sup>2)</sup>

1) 福岡県 開業 (次郎丸動物病院: 〒814-0165 福岡市早良区次郎丸4-9-42)

2) 福岡大学大学院人文科学研究科 (〒814-0180 福岡市城南区七隈8-19-1)

(2012年7月2日受付・2013年3月27日受理)

## 要 約

小動物獣医療技術の発展によって、不治の病の治療が可能となってきた。不治の病の治療のための高度な獣医療の施術を希望する飼い主が存在する一方、臨床の場でその数はそれほど多く感じられない。そこで不治の病の治療に対する飼い主の希望の実態仮説を確立するため、飼い主に質問紙調査を実施し、KJ法を用い量的・質的に解析した。その結果、飼い主は必ずしも「最新の獣医学知見に基づいた治療」を期待しているわけではなく、「獣医師の人間性等の資質」と「治療プロセスの適切な説明」を期待していた。また、動物の苦痛を取り除く治療を一番に希望し、不治の病の治療自体への葛藤を抱えていた。理論的飽和には追試が必要だが、人間心理が関係する獣医療問題の意味を明らかにし創造的解決に導く質的研究法としてのKJ法の可能性を、本研究は示唆した。

—キーワード：KJ法，質的研究，不治の病の治療。

----- 日獣会誌 66, 403～410 (2013)

近年、獣医療は高度に発展し、CTやMRI、がんの化学療法や放射線治療など人間の医療並みのサービスを提供できるようになった。そのため今まで難しかった「不治の病のペットの治療」が可能になり、完全治癒やある程度の寛解状態を実現できるようになった。しかし獣医臨床現場に携わる者から見ているとペットが家族同様に飼育されるようになった昨今、このような高度獣医療の施術を積極的に希望する飼い主が存在する一方、施術を薦めても希望しない飼い主も多いように感じられる。平成19年7月に公表された日本獣医師会小動物臨床部会小動物臨床委員会報告「小動物臨床職域の現状と課題における対応」では、「民間動物診療施設における紹介診療の状況に関するアンケート」の結果として、高度獣医療等の紹介診療は行われているものの実数は少ないことが報告されている。高度獣医療を希望しない理由としてCTやMRI実施のために全身麻酔を必要とするなど人医療にないリスクがあることや高額な医療費などその施術に伴う避けられない負の側面が原因と考えられる。また日本において不治の病のペットに対して安楽死を実施す

ることへの賛否が約半数ずつという報告もあり [1]、治療より安楽死を選択したい希望が関連している可能性もあるが、実態を調査した研究はない。

新島 [2] は、生命維持の費用を賄いきれない飼い主が安楽死を選択するか否かで生じる葛藤がペットロスと関連することを報告している。その中で「ペット用の医療機器を使わない飼い主はひどい飼い主みたいじゃないですか。」という飼い主の語りを紹介している。新島の指摘は獣医療の高度化に伴う治療選択肢の増加、高額化と経済的困難性が飼い主に対して新しい心理的葛藤を引き起こしていることを示唆している。不治の病のペットに対する高度な獣医療は、本当に飼い主に必要とされているのだろうか。そして飼い主はどのようなことを期待しているのだろうか。この内容を明らかにすることは発展した獣医療技術を飼い主にとってさらに有益に提供するために不可欠と考えられる。

論理性と客観性から真実を求める近代科学の手法を用いて、飼い主の希望や期待など人間の心理や感情に基づく現象を明らかにすることは難しい [3, 4]。このため記

† 連絡責任者：矢野 淳 (次郎丸動物病院)

〒814-0165 福岡市早良区次郎丸4-9-42

☎・FAX 092-866-0010

E-mail : jiroumaruanimalhospital@cnc.bbq.jp

表1 質問内容

ペットが当院の診察で、治らない可能性のある病気（がんなど）と仮診断され、効果的な治療を行うには追加検査が必要と説明を受けました。このあとあなたはペットにどのような検査と治療を希望されますか？	
<b>A</b>	追加検査について、一つだけ○をつけてお答えください ①専門的な機関（大学病院など）で検査（CTやMRIを含めた検査）をして治療の可能性を探ってもらいたい ②当院で外注できる追加検査をして治療の可能性を探ってもらいたい（専門的な機関には連れて行きたくない） ③治らない病気と仮診断されたらこれ以上の検査はしてもらいたくない
<b>B</b>	追加検査で治らない病気（がん）と診断されました。治療について希望されるものを一つだけ○をつけてお答えください ①これ以上の治療はしたくない ②苦しみを取り除く治療（鎮痛剤の投与など）だけしてもらいたい ③苦しい思いをさせないようにやむをえず安楽死を選択したい ④生活の質をあげるため、最新の獣医学知見に基づいた治療（抗がん剤、放射線治療など）をしてもらいたい
<b>C</b>	治らないと診断された病気のペットの治療についてあなたが獣医師に期待することがあれば自由に記載してください

述や語りなどのテキストデータを用いてその現象の意味を解明し仮説を生成できる質的研究法が臨床心理学や看護学において採用されている [5]。その質的研究の手法としてテキストデータから意味を抽出するKJ法 [6, 7]がある。

KJ法は文章や会話などの質的データをテキストとして分割したカードを用いて多人数で解析し、その中に含有する現象を有意味で合理的な全体像として把握できるデータ分析法である。問題の創造的な解決のために用いられ、人間の心理現象などを把握できる [7]。

今回、「不治の病のペットの治療に対する飼い主の希望」の実態仮説を確立するため、1動物病院を訪れた飼い主に択一選択式と自由記述式の質問紙調査を実施した。択一選択式の質問紙結果を量的に分析することと合わせて自由記述式の質問紙結果をKJ法を用いて質的に分析し、飼い主の希望の実態仮説を導き出す試みを行った。その結果をふまえ、現実に即した高度獣医療のニーズと質的研究の獣医療への応用性について考察した。

### 材料及び方法

2010年1～3月の2カ月間にA動物病院に来院した飼い主のうち質問紙調査に対し同意を得られた139名に質問紙調査を実施した。質問内容を表1に示す。質問紙への回答は自由であること、年齢と性別は不問で匿名にて実施すること、質問紙の結果は研究にのみ用いること、個人情報の保護について十分配慮することを説明し執り行われた。

択一選択式質問のAとBについての回答は設問ごとに量的に集計した。自由記述式質問Cの回答についてKJ法にて質的に検討した。調査協力者は番号で識別した。

恣意的、主観的なデータ解析に陥るのを避けるため、臨床心理学系の大学教員2名と臨床心理学を専攻する大学院生5名がKJ法のデータ解析を行った。論文筆頭著者はKJ法実施の準備進行役と結果のとりまとめ役とし

て加わり、データ解析に介入しないように配慮した。KJ法は、カード化、テキスト化、カテゴリー化、図示化、文章化解釈の順に分析した。KJ法の具体的方法を示す。質問Cで得た自由記述回答を、調査協力者ごとに切り出して表記したカードを作成し、カードの数を計測した。論文筆頭著者がKJ法の実施方法とKJ法の目的が「不治の病のペットの治療で飼い主が獣医師に期待することを明らかにすること」であることをKJ法解析者へ説明した後、テキスト化、カテゴリー化、図示化、文章化解釈を実施した。KJ法解析者の合議のもと、カードに書かれた内容を一つの意味を持つテキストに分解し（テキスト化；たとえば調査協力者97番のカード《治らないと診断を下した後、そのペットにとって一番よいと思われる方法（治療）をきちんと教えて欲しい》は《治らないと診断を下した後》と《そのペットにとって一番よいと思われる方法（治療）をきちんと教えて欲しい》という2つのテキストに分解された）、そのテキスト数を計測した。次のステップとして全テキストを読めるように適当に配置し、先入観や仮説にとらわれないように配慮しながら、KJ法解析者の合議の上、テキスト同士の関連性を考えながら小グループを作り、見出しを付けて一つのカテゴリーとした（カテゴリー化；たとえばテキスト《そのペットにとって一番よいと思われる方法（治療）をきちんと教えて欲しい》はテキスト《説明をしっかりとっていただきたい》などとグループを作り『治療法の適切な説明』という見出しのカテゴリー小とした）。これを繰り返し小グループのカテゴリー作成が飽和状態に達した後、カテゴリーごとの関係を考えながらグループを作成し見出しをつけ新たなカテゴリーを作成した（たとえば『治療法の適切な説明』は、『治らないという診断を下す』などととも【適切な説明を受けたい】というカテゴリー中に分類された）。この見出し付けとカテゴリー化を繰り返し、カテゴリー小、カテゴリー中、カテゴリー大、カテゴリー特大を作成し、KJ法解析者の

表2 質問Cに対する自由記述回答のKJ法テキスト化（一部抜粋）

カテゴリー特長	カテゴリー一	カテゴリー二	カテゴリー三	カテゴリー四	サンプリ	テキスト
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	6	すべて先生にお任せします。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	102	一生懸命に治療してくださる姿を見れば私は納得します。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	91-2	他の病院にはかかりたくないため先生に最期まで診てもらいたい。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	103-1	一緒に頑張ってくれる。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	46-2	事務的に対応して欲しくない。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	41	ペットや飼い主と向き合っていて欲しい。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	21-3	どうすればよいか相談に乗ってもらいたい。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	18	真剣に思いやりを持って関わって欲しい。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	57-3	最期まで家で看たい。
獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	獣医師の資質への期待	46-1	まず飼い主の心情を察して欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	78	事実をきちんと伝えて欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	97-1	治らないと診断を下す
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	71	説明をしっかりとって欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	84	わかりやすい説明と治療期間。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	97-2	そのペットにとって一番よいと思われる方法（治療）をきちんと教えて欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	108-3	獣医師の考えるベストは納得のいくように話して欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	5-3	過去にあやふやな説明を受けたので。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	109-3	今できる動物にとっての備前で安心してできる環境作り
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	67	最期まで治してもらおう努力を期待します。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	30-2	ペットにとって最良の方法を取ってもらいたい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	44-2	その時々でベストである治療を望みます。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	88-2	最善の方法を教えてください。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	105-3	一緒にいられるように最善のことをやれるように。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	70	一番ベストに負担が少なく済むように治療をして欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	108-2	しかし少しでも長く生きられるような治療を希望して欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	66-2	痛みを取り除いてほしい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	76	可能なかぎりの苦痛の軽減。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	105-1	できるだけ痛くなく
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	7	本人が苦しまないようにターミナルケアを期待します。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	61	苦しめないようにターミナルケアを期待します。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	62	痛みを取り除く治療だけで十分です。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	65	痛みなど苦しんで欲しいとは思いません。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	91-1	苦しむことだけは取り除いた治療を。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	110	できるだけ苦しめないように残った時間を過ごさせたい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	77	ペットが楽しく生活できるようにして欲しいです。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	10	犬の気持ちになって最期まで見守ってほしい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	53	最期まで嘘なく見守って診察にあたって欲しい。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	47	動物はいずれ寿命を全うするわけなので自然の法則に従う。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	57-4	不要な検査治療はしたくない。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	43	状況状態で治療方法の考え方が変わると思うのでわからぬ。
治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	治療プロセスへの期待	21-2	経済的なこともあるし、

矢野 幸 黒瀬 博 口武 雄 他



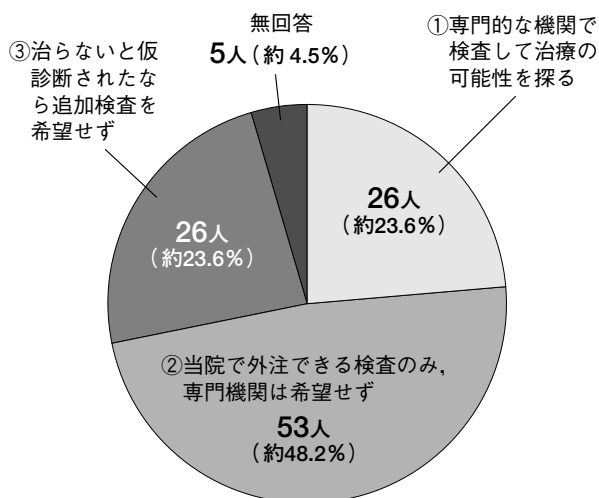


図1 質問A「不治の病に対する検査の希望」への回答 (n = 110)

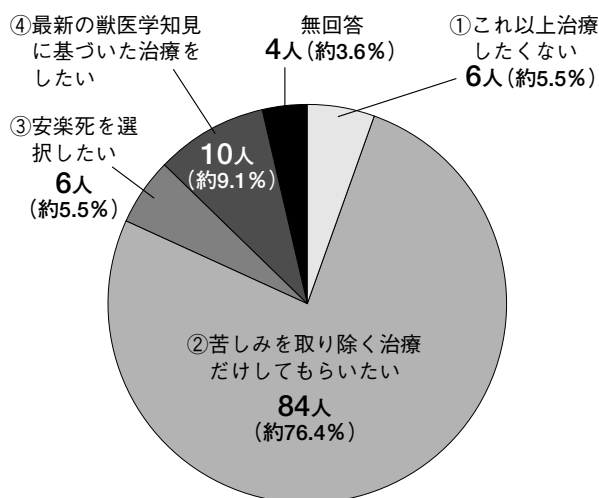


図2 質問B「不治の病の治療の希望」への回答 (n = 110)

合議の上カテゴリーの関連性を図に示した (図示化)。図示の際カテゴリーの見出しの最後にそのカテゴリーに含まれるテキスト数を明示した (KJ法は質的研究法のため、テキスト数量の量的比較の意味はなく、読者がデータを読解する上の目安として明示した)。テキスト化、カテゴリー化、図示化の結果をふまえKJ法解析者の合議のもと図示化結果を文章としてまとめた文章解釈を行った。KJ法結果は論文筆頭著者によって清書された後、後日KJ法解析者参加の会議によって再度検証し、飼い主の不治の病の治療に対する希望の実態仮説生成に用いた。

## 結 果

質問紙を実施した139人中110人から回答用紙を回収し、研究に供した。そのうち質問Aに対して105人、質問Bに対して106人、質問Cに対して52人から回答を得た。

**質問Aへの回答 (不治の病に対する追加検査について) :** 追加検査を行いたいかなかを問う質問Aに対して選択肢②当院で外注できる検査のみ、専門機関は希望せずを選択した人は48.2% (53/110人) で一番多かった。不治の病に対する検査を積極的に希望すると考えられる選択肢①を選択した人は23.6% (26/110人) だった。また、仮診断の段階で治療や検査を諦めると考えられる選択肢③を選択した人は選択肢①を選択した人と同数の23.6% (26/110人) だった (図1)。

**質問Bへの回答 (不治の病に対する治療について) :** 不治の病の治療に対する希望を問う質問Bに対して選択肢②苦しみを取り除く治療を希望するを選択した人が最多で76.4% (84/110人) だった。最新の獣医学知見に基づいた治療を希望する人は9.1% (10/110人) だった。治療を望まない人、安楽死を希望する人はそれぞれ

5.5% (6/110人) だった (図2)。

**質問Cへの回答のKJ法 (不治の病に対する治療について獣医師に期待すること) :** KJ法分析結果においてテキスト化 (一部抜粋) は表2、図示化は図3、文章解釈は表3となった。自由記述回答52個を細分化し得られたテキスト数は全部で77だった。そのうちカテゴリーの「獣医師の資質に期待」に17、「治療プロセスに期待」に56のテキストを含んでいた。テキスト数10以上を含むカテゴリーは、カテゴリー特大で「治療プロセスに期待」、カテゴリー大で「獣医師の資質に期待」、「治療について (完治→延命→疼痛排除)」, カテゴリー中で「適切な説明を受けたい」、「痛みと苦しみを取り除いて欲しい」だった (図3の太字斜体)。

## 考 察

不治の病に対する検査の希望を問う質問Aに対して、専門的な機関で検査して治療の可能性を探ると回答した積極的に高度獣医療の検査を希望する人の数は全体の約4分の1だった。選択肢①と②を合わせた追加検査を希望する人は約4分の3であった。治らない可能性があるが仮診断されただけで、それ以上の検査を希望しない人が全体の約4分の1存在した。

不治の病の治療の希望を問う質問Bに対して、選択肢④の「最新の獣医学知見に基づいた治療」を希望する人は、全体の10分の1に満たなかった。8割近くの人は「苦しみを取り除く治療だけ」望んでいた。質問A, Bでは、飼い主の最上位の希望を聴取するため択一選択式で回答を受けた。このため重複回答ができず飼い主が二つ以上を選択したい意向や選択肢以外の希望を汲み取れていない可能性を考慮しつつ結果を評価する必要がある。また、具体的な病気の治療に対する質問ではないことや仮想の状況に対しての回答であったことから、実情との

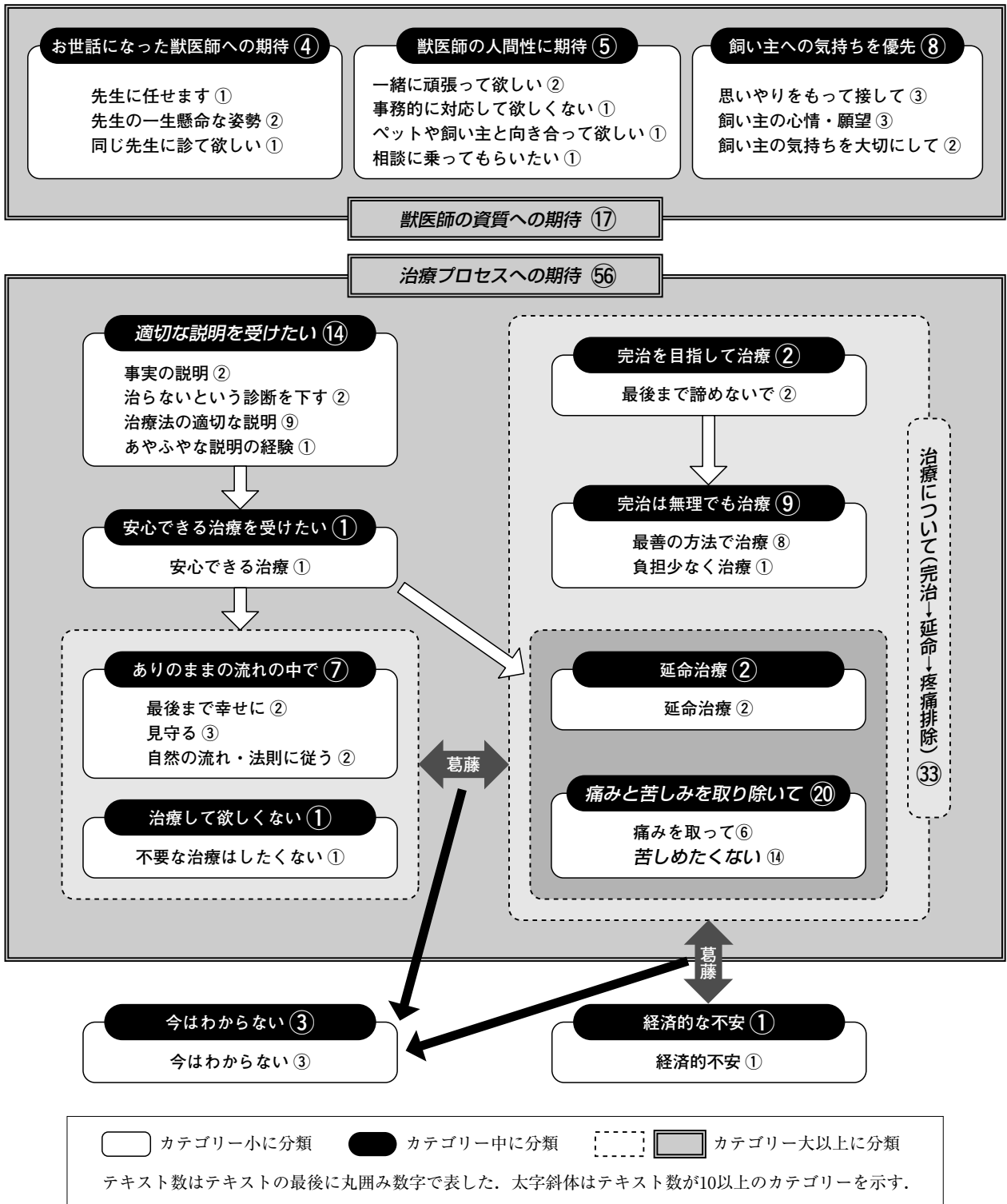


図3 質問Cに対する自由記述回答のKJ法による分析の図示化

比較はできない。しかしながら質問A, Bの結果から高度な獣医療に対して強い希望を持つ飼い主は必ずしも多くはないことが示唆された。

不治の病の治療に対する獣医師への期待を問う質問CへのKJ法分析結果において、全テキスト77のうち「獣医師の資質に期待」に17、「治療プロセスに期待」に56のテキストを含んでいた。その他テキスト数10以上を

含むカテゴリーは、「治療について(完治→延命→疼痛排除)」, 「適切な説明を受けたい」, 「痛みと苦しみを取り除いて欲しい」だった。KJ法の結果は、飼い主は獣医師に、「人間性」や飼い主を優先に「思いやる気持ち」などの治療技術以外の資質を期待していること、また「苦痛を取り除く」治療を希望し、治療について「適切な説明」を期待していることを示している。また、「経

表3 質問CのKJ法文章化解釈

飼い主は、不治の病のペットの治療について、獣医師に以下の期待をしている。

- ① 獣医師の資質への期待である。これは治療技術に対するものではなく、世話になった獣医師への期待、人間性や飼い主の気持ちを優先して欲しいとする期待である。
- ② 治療プロセスへの期待である。病気の事実、診断、治療への適切な説明を希望し、安心できる治療につなげたいと考えている。
- ③ 治らなくても完治を目指して欲しい、完治は無理でも最善の方法で治療をと考える飼い主もいるが、大部分は痛みと苦しみを取り除いて欲しいと考えている。
- ④ ありのままにするのがよいのではないかと、経済的に不安であるなどの葛藤を抱えながら治療について考えている。

済的な不安」や「ありのままの流れ」に任せたい心情などから治療に対して葛藤があることも伺われ、「今はわからない」と態度を保留する姿勢や「治療して欲しくない」とする姿勢も見受けられた。人医療の患者満足度の調査において、医師の説明のわかりやすさや思いやり、話を十分に聞く態度が患者満足度を高め [8-14]、医師の技能よりも影響を及ぼすという報告があり [15]、「獣医師の人間性等の資質」や「適切な説明を受けたい」を不治の病のペットの飼い主が希望する点と共通し、興味深い。また、杉田 [1] は、飼い主は不治の病のペットの安楽死の是非について迷う回答をし、賛否両論を含む中庸的な意見を持つことを指摘しているが、本KJ法の結果においても同様に飼い主の迷い（葛藤）を含む文脈が示された。

質問A, Bの結果と質問CのKJ法分析結果から飼い主の不治の病の治療に対する希望の実態仮説を総合的に考察すると、飼い主は獣医師に対して必ずしも「最新の獣医学知見に基づいた治療」を期待しているわけではなく、「獣医師の人間性等の資質」と「治療プロセスの適切な説明」によって対応してもらうことを期待していると仮説される。飼い主は、病気の事実、診断、治療への適切な説明を希望し、安心できる治療につなげたいと考えている。治らなくても完治を目指して欲しい、完治は無理でも最善の方法で治療をと考える飼い主もいるが、大部分は「痛みと苦しみを取り除いて」欲しいと考えている。また、ありのままにするのがよいのではないかと、経済的に不安であるなどの葛藤を抱えながら治療について考えている。

本研究は記述データを用いた質的研究に相当し、意味を仮説的に生成する研究であるため、質的研究の手法にのっとり継続した実証研究により理論的飽和に至っているか検証される必要がある [3, 5, 16]。よって飼い主ニーズに合う高度獣医療のあり方を明らかにするためには、今回明らかになった飼い主心理の実態仮説をもとに理論的飽和を目指す量的・質的な追試を行う必要がある。

今回、択一選択式質問A, Bによって高度な獣医療を望む飼い主がそれほど多くないことが明らかになったが、なぜ飼い主が高度獣医療を望まないかというその原

因は明らかにできていない。質問CのKJ法分析から、不治の病のペットを飼育する飼い主は、完治を目指す治療よりも獣医師の人間性や適切な説明によって安心を得たいことを優先すること、経済的な不安があること、ありのままの流れで最期を見届けたい希望があること、不治の病の時は苦痛だけ取り除いて欲しい希望があること等が関連しているのかもしれない。またペットへの愛着がペットロスや安楽死への考え方に影響するため [1, 2]、ペットへの愛着度が不治の病の治療への希望に影響することが考えられる。これらのことをふまえ追試が必要である。

さらに、飼い主が不治の病のペットの治療において獣医師の人間性等の資質や治療プロセスの適切な説明を期待しているが、このことがどのようにすれば実現できるのか明らかにするための追試が必要である。人医療において医師と患者の認識のギャップについての報告がある [17] が、獣医師の有する高度獣医療に対する認識や期待について調査することは、飼い主と獣医師の認識のずれ [18] を調整し、飼い主により有益な獣医療サービスの提供につながると考えられる。また、飼い主ニーズに合ったインフォームドコンセントやコミュニケーションなどいわゆる獣医療面接の具体的な方法についての研究も少なく [19, 20]、今後継続的な議論と調査が必要である。

本研究の結果をさらに一般化するために、不治の病のペットの検査と治療の希望をさらに精緻・細分化して測定できる質問紙を開発すること、サンプル規模や多様性（性別、年齢、飼育動物種、飼育世帯情報 [信仰宗教、世帯収入、世帯構成人数] 等の質問項目）を増やすこと [1]、研究対象者の一般化（動物病院来院者以外のデータの採取）を行うことによって統計的にデータを再検証する必要がある。また質問紙調査だけでなく面接調査を行うことでより深い意見の集積ができ意味を汲み取れる可能性がある。

本研究が示す通り、人間心理が関係する現象を選択式質問紙によって量的にのみ評価するよりも、KJ法を用いて評価することがその現象のさまざまな意味を汲み取ることにつながった。獣医療における質的研究の報告数は少ない [18, 21-23] が、看護学 [24]・歯学 [25]・



心理学 [26] において報告されている KJ 法という質的研究法が人間心理が関係する獣医療問題の意味を明らかにし、創造的な解決に導く方法として有効である可能性を本研究は示唆した。

今回の調査にご協力いただいた飼い主の皆様へ深く感謝する。

### 引用文献

- [1] 杉田陽出：不治の病にかかったペットは安楽死させるべきか？ —JGSS-2006 のデータに見る日本人のペットの安楽死観—, 日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集 [9], JGSS Research Series, 6, 53-72 (2009)
- [2] 新島典子：飼主の死生観と亡きペットの存在感 —「家族同様」の対象を亡くすとは, 死生学研究, 2006 年春号, 165-188 (2006)
- [3] 河合隼雄：事例研究の意義, 特集事例研究, 臨床心理学, 1, 4-9 (2001)
- [4] 中村雄二郎：V 医療と臨床の知, 臨床の知とは何か, 141-171, 岩波書店, 東京 (1992)
- [5] 高橋 都：医療・看護領域における質的研究の意義, 事例から学ぶはじめての質的研究法医療・看護編, 秋田喜代美, 能智正博監修, 高橋 都, 会田薫子編, 2-15, 東京図書, 東京 (2007)
- [6] 川喜田二郎：発想をうながす KJ 法, 発想法 創造性開発のために, 65-114, 中公新書, 東京 (1967)
- [7] 山浦晴男：科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ 法) と考察法の理論と技術, 科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ 法) と考察法 (I), 看護研究, 41, 11-32 (2008)
- [8] Cleary P, McNeil B : Patient Satisfaction as an Indicator of Quality Care, *Inquiry*, 25, 25-36 (1988)
- [9] Hall J, Roter D, Katz N : Meta-Analysis of Correlates of Provider Behavior in Medical Encounters, *Medical Care*, 26, 657-672 (1988)
- [10] 今井壽正, 楊 学坤, 小島 茂, 櫻井美鈴, 武藤孝司：大学病院の患者満足度調査 —外来・入院患者の満足度に及ぼす要因の解析—, 病院管理, 37, 63-74 (2001)
- [11] 恩田光子, 小林暁峯, 黒田和夫, 全田 浩：病院における薬の説明に対する患者満足度に影響を与える要因に関する研究, 病院管理, 41, 7-14 (2004)
- [12] 田久浩志：満足度と重視度による外来患者サービスの評価, 病院管理, 31, 15-24 (1994)
- [13] 長谷川万希子, 杉田 聡：患者満足度による医療の評価 —大学病院外来における調査から—, 病院管理, 30, 31-40 (1993)
- [14] 前田 泉, 徳田茂二：医師のコミュニケーション・スキルが患者満足度を決める, 対話で患者をよべ!, 患者満足度 —コミュニケーションと受療行動のダイナミズム, 9-11, 日本評論社, 東京 (2003)
- [15] 今中雄一, 荒記俊一, 村田勝敬, 信友浩一：医師および病院に対する外来患者の満足度と継続受診意志におよぼす要因 —総合病院における解析—, 日本公衆衛生雑誌, 40, 624-635 (1993)
- [16] Holloway I, Wheeler S : 質的研究の特質, ナースのための質的研究入門 研究方法から論文作成まで, 野口美和子監訳, 第 1 版, 1-20, 医学書院, 東京 (2000)
- [17] 塚原康博：医師・患者関係における理想と現実のギャップが患者満足度に与える効果 —医療消費者を対象とした共分散構造分析—, 日本社会情報学会学会誌, 20, 31-41 (2009)
- [18] 矢野 淳：ペットの不妊手術に対する葛藤と手術啓発が誘起する認知的不協和 —一般人と獣医師の認識のギャップ—, 人間性心理学研究, 29, 37-50 (2011)
- [19] 矢野 淳：獣医療におけるナラティブ, 社会構成主義からの治療構造の理解, 福岡大学臨床心理学研究, 9, 29-36 (2010)
- [20] Manning P : Veterinary consultations : the value of reflection, *In Practice*, 30, 340-343 (2008)
- [21] 小倉啓子：イヌ・ネコ飼い主の日常的飼育ケアの安定と継続に関する質的研究 —飼育の準備段階における飼い主の体験から—, *Animal Nursing*, 15-16, 17-23 (2010-11)
- [22] Jason BC, Cindy LA, Brenda NB : A focus group study of veterinarians' and pet owners' perceptions of veterinarian-client communication in companion animal practice, *J Am Vet Med Assoc*, 233, 1072-1080 (2008)
- [23] 木村祐哉, 川畑秀伸, 大島寿美子, 片山泰章, 前沢政次：ペットロス体験を「症候群」と称することによる影響, ヒトと動物の関係学会誌, 24, 63-70 (2009)
- [24] 中野裕子：修論「身体心地よさに働きかける看護援助 —糖尿病患者に対するマッサージを介したセルフケア援助をとおして得られた患者の反応より」の解説と質的統合法 (KJ 法) による分析, 看護研究, 41, 91-101 (2008)
- [25] 山本祐子, 堀口逸子, 丸井英二：訪問歯科診療における抜歯に対する歯科医師の姿勢 —某私立歯科大学卒業生を対象とした面接調査—, 口腔衛生会誌, 60, 170-177 (2010)
- [26] 岡本かおり：心理臨床家が抱える困難と職業的発達を促す要因について, 心理臨床学研究, 25, 516-527 (2007)

A Qualitative Examination of Pet Owners' Expectations Regarding the Treatment  
of Incurable Diseases in Their Pets : Using the KJ-Method

Atsushi YANO<sup>1), 2)†</sup>, Megumi KUROKAMI<sup>2)</sup>, Takahiro HIDAKA<sup>2)</sup>, Keiko MORINAKA<sup>2)</sup>,  
Yuki HONTOKU<sup>2)</sup>, Yoko SARADA<sup>2)</sup>, Ryuich TAMURA<sup>2)</sup> and Mikio HAYASHI<sup>2)</sup>

1) *Jiroumaru Animal Hospital, 4-9-42 Jiroumaru, Sawara-ku, Fukuoka, 814-0165, Japan*

2) *Graduate School of the Humanities, Fukuoka University, 8-19-1 Nanakuma, Jonan-ku,  
Fukuoka, 814-0180, Japan*

**SUMMARY**

Treating incurable diseases in pets has become possible as a result of the development of veterinary medical technology. It may seem that there would be few owners of companion animals who would wish to treat their animals with the help of highly developed veterinary technology at the actual time of a veterinary consultation. A questionnaire was administered to the owners, and a qualitative and quantitative analysis was carried out using the KJ-Method to investigate the owners' wishes with respect to the treatment of previously incurable diseases in their pets. It was found that many owners wished their pets to undergo analgesic treatment first, but some wanted their pets to be treated using the latest highly developed veterinary technology. They also hoped that veterinarians would be humane and provide them with a proper explanation of the procedures. In addition, they had difficulties regarding the propriety of the treatment. Although theoretical saturation required supplementary examination, this research showed the potential of qualitative analysis such as the KJ-Method as a solution for veterinary medical problems related to human psychology.

— Key words : KJ-Method, Qualitative examination, The treatment of previously incurable diseases in small animals.

† *Correspondence to : Atsushi YANO (Jiroumaru Animal Hospital)*

*4-9-42 Jiroumaru, Sawaraku, Fukuoka, 814-0165, Japan*

*TEL · FAX 092-866-0010 E-mail : jiroumaruanimalhospital@cnc.bbq.jp*

*J. Jpn. Vet. Med. Assoc., 66, 403 ~ 410 (2013)*